

第七章「ここから（仮）」（化城論品第七）

著作権等は仏教学こころの研究所に帰属します。無断での複写・転用・引用などを禁じます。

出版前の原稿ですので、取り扱いには十分お気をつけください。皆様のご協力、ご理解のほど、宜しくお願い致します。

頁	読み下し文（平楽寺本）	偈	研究所 訳
153-1	仏、諸の比丘に告げたまわく、乃往過去無量無辺不可思議阿僧祇劫、爾の時に仏いましき、大通智勝如来・応供・正徧知・明行足・善逝・世間解・無上士・調御丈夫・天人師・仏・世尊と名く。其の国を好成と名け、劫を大相と名く。諸の比丘、彼の仏の滅度より已来、甚だ大に久遠なり。		「比丘たちよ、それは遙か往古のことであつた。数えることなど到底できない永い永い歲月、数えることができないどころか茫漠として量ることもできない、想像することもできない、そのような昔の、いやいや、それよりもっともっと昔むかしのことであつた。まさに、そのとき、大神通智勝(だいじんつうちしょう)という名の如来・勝れた人・正しくあますところなくさとした人が、世に現われた。智と行いの完璧な人・成就者・世間を知り尽くした人・頂きに立つ人・修行者を養い馴らす人・神がみと人びととの師・目覚めた者・尊い人が。誕生(たんじょう)と呼ばれる世界に、大相(だいそう)と呼ばれる劫(とき)に。比丘たちよ、その仏(ほとけ)は、どのくらい遠い昔に出現されたのか。
153-4	譬えば三千大千世界の所有の地種を、仮使人あつて磨り以て墨と爲し、東方千の国土を過ぎて乃ち一点を下さん、大さ微塵の如し。又千の国土を過ぎて復一点を下さん。是の如く展転して地種の墨を尽くさんが如き、汝等が意に於て云何。		たとえば、この三千大千世界にあるすべての大地の要素があつたとして、それを、ある男が悉く粉にしたとしよう、微塵にしたとしよう。そして、男がその微細な塵を一つつまみ、そこから東の方角へ千ほどの世界を越えて行き、そこにそれを置いてきたとしよう。男は二つ目の微細な塵をつまみ、そこからさらに遠くの千もの世界を越えて行き、二つ目のそれを置いてきたとしよう。男は、このようにして大地の要素を悉く東の方角に置いてきたとしよう。これを、どう思う、比丘たちよ。
153-8	是の諸の国土を、若しは算師若しは算師の弟子、能く辺際を得て其の数を知らんや不や。不也、世尊。諸の比丘、是の人の経る所の国土の、若しは点せると点せざるとを、		このようにしてすべての世界の果て、果ての果て。そのときがどのくらい先きなのか、計算できるか？」比丘たちは、申すのでありました。「いいえ、いいえ、そのようなことはできません、お釈迦さま。いいえ、それはできません、成就者・仏よ。」お釈迦さまが、仰せになるのでありました。「いや、それは可能なのだ、比丘たちよ。そうしたもろもろの世界の果てるときがいっつののか、計算することはできるのだ。数学者あるいは計算の達人であれば、それらの世界に置いてこられた微細な塵の数と、未だ持っていかれていない塵の数とを数えることによって。だが、大神通智勝如来が般涅槃されたその後の永い永

	尽く抹して塵となして、一塵を一劫とせん。彼の仏の滅度より已来、復是の数に過ぎたること無量無辺百千万億阿僧祇劫なり。我如来の知見力を以ての故に、彼の久遠を観ること猶お今日の如し。		い歳月の果てはいつなのか、それは、決して計算できない。考えも及ばぬ、量ることもできぬ、それほどの歳月なのだ。さて、比丘たちよ、それほど遠い昔に大神通智勝如来は般涅槃されたのだが、如来・仏の力、この智慧と見解とによって、われ・釈迦牟尼仏には、あたかも昨日今日般涅槃されたかのように想い出される。」
154-2	爾の時に世尊、重ねて此の義を宣べんと欲して、偈を説いて言わく、		お釈迦さまは、そして、そのとき、このような詩を詩われるのでありました。
154-4	我過去世の 無量無辺劫を念うに 仏両足尊いましき 大通智勝と名く	1	往古の／限りなく遠い昔に現われた／両の足にて立てる者／人の最高位・仏を／大神通智勝という名の//偉大なる聖者を／われ・釈迦牟尼仏は／想い出す／聖者は／そのとき無上の勝利者・仏であった(1)
154-5	人あって力を以て 三千大千の土を磨って 此の諸の地種を尽くして 皆悉く以て墨となし	2	たとえば／三千世界を／とある者が／塵にしたとしよう／その、ひとつの微細な
154-6	千の国土を過ぎて 乃ち一の塵点を下さん 是の如く展転し点して 此の諸の塵墨を尽くさんが如し	3	微粒子を／つまんで／千の国土を越えて行き／それをそこに／粒の一つ目を そこに 置いてくるとしよう(2)
154-7	是の如き諸の国土の 点せざると等を 復尽く抹して塵となし 一塵を一劫とせん	4	それら三千世界には／量りしれない粉塵が／あったとしよう／その粉塵を／さらに碎き//塵として//その塵をあますところなく／永い永い思いも及ばぬ歳月をかけて／行くごとにその印として／置いてきたとしよう(4)
154-9	此の諸の微塵の数に 其の劫復是れに過ぎたり 彼の仏の滅度より来 是の如く無量劫なり	5	かの成就者・仏が／般涅槃されたのは／そのように／量りしれない／際限もなく遠い遠い 昔のことであった//微細な塵のすべてが／印となり／無くなってしまう／尽きてしまう／それほど遠い遙か遠い昔のことであった(5)
154-10	如来の無碍智 彼の仏の滅度及び声聞菩薩を知ること 今の滅度を見るが如し	6	それほど久しい昔に／涅槃に入られた／かの指導者・仏を／かの声聞たちを／かの菩薩たちを//如来・仏たちの智慧とは／どのようなものを／そこで起こったことを／あたかも昨日今日のここのように／われ・釈迦牟尼仏は想い出す(6)

154-11	諸の比丘当に知るべし 仏智は 淨くして微妙に 無漏無所碍にし て 無量劫を通達す	7	比丘たちよ／このようなものなのだ／限らない智慧である／如来・仏の／この智慧はわれ・釈迦牟尼仏には//わかる／ あまたの／量りしれぬ歳月を経た後にも／鋭く完璧なる記憶によって(7)
155-1	仏、諸の比丘に告げたまわく、大 神通智勝仏は寿五百四十万億那由 他劫なり、其の仏本道場に坐して、		そして、比丘たちよ、大神通智勝如来・勝れた人・正しくあますところなくさとりった人の寿命は、五百四十万コーティ・ナユタ 劫であった。
155-2	魔軍を破し已って、阿耨多羅三藐 三菩提を得たもうに垂んとするに、 而も諸仏の法現在前せず。是の如 く一小劫乃至十小劫、結跏趺坐し て心身動したまわず。而も諸仏の 法猶お在前せざりき。		さて、昔、無上の正しいさとりを得ていなかったとき、その尊い人、大神通智勝如来が、美事な最上のさとりの座に到り、魔 の軍勢を悉く打ち破り打ち負かした。“打ち破り打ち負かしたなら、無上の正しいさとりが得られるであろう”と。だが、大神 通智勝には、まだ、無上の正しいさとりを得た者の具える属性(もの)が、顕(あらわ)れなかった。
			大神通智勝は、菩提樹の下(もと)のさとりの座に、一支劫の間(あいだ)坐っていた。次の支劫も、そのままであった。しかし、無 上の正しいさとりは得られなかった。第三も第四も第五も第六も第七も第八も第九も、そして第十の支劫の間も、菩提樹の下 (もと)のさとりの座に留まったままであった。その間(かん)の所作(しよさ)といえは、唯(ただ)一つ結跏趺坐のみ、立ちあがるこ ともなかった。不動の心を保ち、身じろぎもせずに不動の身体を保っていた。しかし、大神通智勝に、無上の正しいさとりを得た 者の具える属性(もの)が、この間(かん)にも顕れることはなかった。比丘たちよ、美事な最上の菩提樹の下(もと)に坐(ざ)す、 その大神通智勝如来のために、三十三天の神がみによって、高さが百由旬もある、大きな獅子の座がしつらえられた。大神通 智勝如来は、その獅子の座に坐し、無上の正しいさとりを得たのであった。そして、大神通智勝如来が、さとりの座につかれる や否や、まさに、
155-4	爾の時に忉利の諸天、先より彼の 仏の為に菩提樹下に於て師子座を 敷けり、高さ一由旬。仏此の座に於 て当に阿耨多羅三藐三菩提を得 たもうべしと。適めて此の座に坐し たもう。時に諸の梵天王、衆の天華 を雨らすこと、面ごとに百由旬なり。 香風時来って萎める華を吹き去っ		そのとき、梵天界の若き神がみが、さとりの座のまわり百由旬にわたり、天の花を雨と降らせた。若き神がみたちは、空中に風を まき起こしては、萎(しお)れた花を吹き飛ばしてしまう。そのようにして、花の雨は、さとりの座に居(お)られる大神通智勝如来に 絶え間なく降りそそいだ。若き神がみたちは、満十支劫もの間(あいだ)、まき散らせ続けたのであった。大神通智勝如来が般涅槃 されるときまで、そのように、花の雨を降らせ続け、まき散らせ続けたのであった。 四大天王界の若き神がみたちは、天界の天の鼓(つづみ)を鳴り響かせた。すぐれた最高のさとりの座に居られる大神通智勝 如来を敬い、打ち鳴らし続けるのであった。満十支劫もの間(あいだ)坐(ざ)し続けられる、その大神通智勝如来のために。さら に、天界の鐘(かね)を打ち鳴らしたのであった。大神通智勝如来が大いなる般涅槃をなされる、そのときまで。

	て、更に新しき者を雨らす。是の如く絶えず十小劫を満てて仏を供養す。乃至滅度まで常に此の華を雨らしき。四王の諸天、仏を供養せんが為に常に天鼓を撃つ。其の余の諸天、天の伎樂を作すこと十小劫を満つ。滅度に至るまで亦復是の如し。		
155-11	諸の比丘、大通智勝仏十小劫を過ぎて諸仏の法乃し現在前して、阿耨多羅三藐三菩提を成じたまいき。		かくして、実に比丘たちよ、十支劫の後に、その尊い人、大神通智勝如来・勝れた人・正しくあますところなくさとした人・仏は、無上の正しいさとりをさとられたのであった。
156-1	其の仏未だ出家したまわざりし時に十六の子あり。其の第一をば名を智積という。諸子各種々の珍異玩好の具あり。父阿耨多羅三藐三菩提を成ずることを得たもうを聞いて、皆所珍を捨てて仏所に往詣す。諸母涕泣して随って之を送る其の祖転輪聖王、一百の大臣及び余の百千万億の人民と、皆共に圍繞し随って道場に至る。咸く大通智勝如来に親近して、供養・恭敬・尊重・讃歎したてまつらんと欲し、到り已って頭面に足を礼し、仏を繞り畢已って一心に合掌し、世尊を瞻仰して偈を以て頌して曰さく、		さて、大神通智勝如来が、さとられるや否や、それを知った十六人の王子たち、いや、その尊い人・仏には、自身が王子であったときの十六人の息子たちがいた。「智積」が総領だった。比丘たちよ、その十六人の王子たちは、それぞれに、嬉しい目にも美しい色とりどりの、さまざまな遊び道具を持っていた。比丘たちよ、十六人の王子たちは、尊い人・大神通智勝如来・勝れた人・正しくあますところなくさとした人・仏が、無上の正しいさとりを得たことを知るや、さまざまな嬉しい遊び道具を投げ捨て、泣きじゃくる母たちや乳母たちに囲まれかしずかれながら、また、転輪聖王であり聖者であり大富豪である大王と沢山の大臣たちと、幾百千コーティ・ナユタもの生きとし生けるものたちに囲まれかしずかれながら、すぐれた最上のさとの座におられる尊い人・大神通智勝如来・勝れた人・正しくあますところなくさとした人・仏に、近づいていった。そして、尊い人を、尊び、敬い、敬愛し、供養し、称えるために、近づいていった。そばまでゆき、如来・仏の両の足に頭をつけて挨拶をし、右まわりに三遍まわり掌を合わせ、尊い人と向かいあい、このような美しい詩を詩って、讃めたたえるのであった。

156-8	大威徳世尊 衆生を度せんが為の故に 無量億歳に於て 爾して乃し成仏することを得	8	あなたは／偉大な お医者さまです／あなたは／こよなき お方です／限らない劫を経て//あなたは到達されました／生きとし生けるものたちが／この世において済われるところまで／あなたは あなたの善き願いを／まっとうされたのです(8)
156-9	諸願已に具足したまえり 善哉 吉無上 世尊は甚だ希有なり 一び坐して十小劫	9	あなたは／十支劫もの間／さまざま／とても難しい修行をされました／定まった座にどっかりと坐し//あなたの身体は／その間／微動だにもしませんでした／手を動かすことも足を動かすこともなく／身体中のどの部分も動くことはありませんでした(9)
156-10	身体及び手足 静然として安じて動せず 其の心常に愼泊にして未だ曾て散乱あらず	10	あなたの心は／制御されています／とても落ち着いています／揺らぐことはありません／どんなときにも//動揺することがありません／あなたの心は／決して乱されることがありません／きわめて静謐(せいひつ)の境地にあられます／あなたは無垢でいらっしゃる(10)
156-11	究竟して永く寂滅し 無漏の法に安住したまえり 今者世尊の 安穩に仏道を成じたもうを見て	11	あなたは幸せでいらっしゃいます／晴ればれとしておられます／心安らかにあられます／こよなきざとりをさとられて／あなたの行くてを阻むものはありません//
156-12	我等善利を得 称慶して大に歡喜す 衆生は常に苦悩し 盲冥にして導師なし	12	わたしたちにとり／このような幸いはありません／わたしたちは幸せです／人びとの主／獅子よ、仏よ(11) 指導者・仏の居られない／生けるものたちのありさまは／視力を奪われてしまった／幸薄き人のように／苦しみばかりです//
156-13	苦尽の道を識らず 解脱を求むることを知らずして 長夜に悪趣を増し 諸天衆を減損す	13	彼らは／苦を終わりに到らしめる／道を知りません／心を解き放つための／努力はできませんでした(12) 悪しき境界に住むものたちが／増えてゆきました／永い間／天界の衆たちが／減ってゆきました//
156-14	冥きより冥きに入り 永く仏の名を聞かず 今仏最上 安穩無漏の法を得たまえり	14	それが常でした／勝利者・仏たちの声が／まったく聞かれない／この世は、どこも闇でした／何んにも見えませんでした(13)そして いま ここに／世間を知り尽くした人・仏よ／あなたは／最上にして完璧な／すばらしい足場を獲得されました//
156-	我等及び天人 これ最大利を得たり 是の故に咸く稽首して 無上尊を帰命したてまつる		わたしたちも／世の人びとも幸せになりました／あなたを寄りどころに／わたしたちは出発します／主・仏よ(14)

157-6	爾の時に十六王子、偈をもって 仏を讃め已って、世尊に法輪を転 じたまえと勧請し、咸く是の言を 作さく、世尊、法を説きたまえ、安 穩ならしむる所多からん。諸天人 民を憐愍し饒益したまえ。重ねて 偈を説いて言さく、		さて、比丘たちよ、王子であり息子である彼の十六人の王の子らは、その尊い人、大神通智勝如来・勝れた人・正しくあ ますところなくさとした人・仏に向かって、このような美しい詩を詩って称え、請うのであった。『教えを説くことをはじめてい ただきとうございます、尊い人・仏よ。教えを、お示してください、成就者・仏よ。多くの人びとのためになり、幸せをもたらす存 在として、世の中を憂え、群れ居る神がみや人間たちの役に立ち、ためになり、幸せのために。』そして、次のような詩(う た)を詩(うた)うのであった。
157-9	世雄は等倫なし 百福をもって 自ら莊嚴し 無上の智慧を得たま えり 願わくは世間の為に説いて	15	お示してください／教えを／百もの福相を持てる者・仏よ／指導者・仏よ／比類なき大いなる慧眼・仏よ//あなたが獲得さ れた／勝れた／ひとときわ卓れた智慧を／解き明かしてください／神がみも共なる世の人びとのために(15)
157- 10	我等 及び諸の衆生の類を度 脱し為に分別し顕示して 是の智 慧を得せしめたまえ	16	わたしたちと／ここに居る生きとし生けるものたちを／お済いください／お示してください／如来・仏たちの智慧を//わたし たちにも／そして／ここに居る生きとし生けるものたちにも／この最高のさとりが／得られますように(16)
157- 11	若し我等仏を得ば 衆生亦復 然ならん 世尊は衆生 深心の所 念を知り	17	あなたは／すっかり知っておられます／生きとし生けるものたちの／行いと智慧とを／堅い決意と//既に積んだ徳とを／ そして／心の向かうところとを／お説きください／こよなき すぐれた教えを(17)
157- 12	亦所行の道を知り 又智慧力 を知しめせり欲楽及び修福 宿命 所行の業		
158-1	世尊悉く知しめし已れり 当に無 上輪を転じたもうべし		
158-3	仏、諸の比丘に告げたまわく、 大通智勝仏阿耨多羅三藐三菩 提を得たまいし時、		比丘たちよ。そのとき、尊い人・大神通智勝如来・勝れた人・正しくあますところなくさとした人・仏が、無上の正しいさと りをさとりつつある、そのとき、
158-4	十方各五百万億の諸仏世界六 種に震動し、其の国の中間幽冥 の処、日月の威光も照すこと能わ ざる所、而も皆大に明かなり。其		十方のそれぞれの方角にある、五百万コーティ・ナユタもの世界が、動き激しく動き、揺れ激しく揺れ、震え激しく震えた。そ して、大いなる光に包まれた。三千大千世界すべての世界には、世界の間があり、そこは災に覆いつくされた暗黒の闇で あり、大いなる不思議な力と大いなる威力と大いなる威光とを持つ月や太陽ですら、その光によって光を感じさせること も、色をして色と感じさせることも、輝きによって輝かせることもできない。そうした世界の間(はざま)をも、そのとき、大いな

	の中の衆生各相見ることを得て、咸く是の言を作さく、此の中に云何ぞ忽ちに衆生を生ぜる。		る光は照らし出した。そうした世の間(はざま)に生まれた、生けるものたち、彼らは顔を見合わせ、たがいに確かめあうのであった。『おお、ほかにも衆生(ひと)がいたのだ。おお、ほかにも、ここに生まれた衆生(もの)がいたのだ』と。
158-7	又其の国界の諸天の宮殿乃至梵宮まで六種に震動し、大光普く照して世界に遍満し、諸天の光に勝れり。		このようなすべての世界が、神がみの住まいが、神がみの空飛ぶ宮殿が、梵天界に到るまで、動き激しく動き、揺れ激しく揺れ、震え激しく震えたのであった。そして、神がみの威力を凌(しの)ぐ、大いなる光に包まれたのであった。そのようなわけで、比丘たちよ、三千大千世界において、大いなる地の揺れと、大いなる気(け)高い光が、世に現われたのであった。
158-8	爾の時に東方五百万億の諸の国土の中の梵天の宮殿、		さて、東の方角では、五百万コーティ・ナユタもの世界において、梵天の空飛ぶ宮殿が一際輝き、照り映え、明るく、気高く、威光を放っていた
158-9	光明照耀して常の明に倍れり。		
158-9	諸の梵天王各是の念を作さく、今者宮殿の光明昔より未だ有らざる所なり。何の因縁を以て此の相を現ずる。		比丘たちよ、大梵天たちは思うのであった、＜梵天たちの空飛ぶ宮殿が一際輝き、照り映え、明るく、気高く、威光を放っている。これは何(なん)の前兆(まえぶれ)なのであろうか＞と。
158-11	是の時に諸の梵天王即ち各相詣って共に此の事を議す。而も彼の衆の中に一りの大梵天王あり、救一切と名く。諸の梵衆の為に偈を説いて言わく、		そこで、比丘たちよ、それら五百万コーティ・ナユタもの世界の大梵天と呼ばれる者たちは、たがいの宮殿を訪れ、語りあった。そして、比丘たちよ、救一切という名の大梵天が、梵天たちの、その大集団に向かい、詩を詩って語りかけるのであった。
159-2	我等が諸の宮殿 光明昔より未だ有らず 此れは是れ何の因縁ぞ 宜しく各共に之を求むべし	18	今日は／とてもうれしい／このうえなくすぐれた空飛ぶ宮殿が／どれも燃え立つように／輝いている//気品ある輝きと光明とが／心を弾ませる／なにゆえに／今日／このようなことになったのであろう(18)
159-3	大徳の天の生ぜるとやせん 仏の世間に出でたまえるとやせん 而も此の大光明 遍く十方を照す	19	そうだ／究めるのだ／その意味を／今日／どこかの神の子が生まれたのだろうか//その子に／このような威力があるがゆえに／未だかつてなかったことが／今日このように／見られるのであろうか(19)
		20	あるいは／人びとの王たる仏陀であろうか／仏陀が／出現されたのであろうか／今日 いずれかの世に//これは／仏陀の兆に違いない／気品に満ちて気高く／いま／十方が輝いている(20)

159-5	爾の時に五百万億の国土の諸の梵天王、宮殿と俱に、各衣・を以て諸の天華を盛って、共に西方に詣いて是の相を推尋するに、大通智勝如来の道場菩提樹下に処し師子座に坐して、諸天・龍王・乾闥婆・緊那羅・摩・羅伽・人非人等の恭敬圍繞せるを見、及び十六王子の仏に転法輪を請するを見る。	さて、比丘たちよ、そうした五百万コーティ・ナユタもの世界には大梵天と呼ばれる者たちがおり、彼らの悉くが打ち揃い、神ごうしいそれぞれの梵天の乗り物・宮殿に乗り込み、須弥山ほどの量の天の花冠を携え、東へ西へ南へ北へと巡りながら、探りながら、西の方角へと進んでいった。そして、見たのだ、比丘たちよ、五百万コーティ・ナユタもの世界の大梵天たちは、西の方角に、尊い人・大神通智勝如来・勝れた人・正しくあますところなくさとした人・仏を。最上のさとの座におられる、菩提樹の下の獅子の座に坐っておられる、神や龍、夜叉、乾闥婆、阿修羅、迦樓羅、緊那羅、摩睺羅伽など、人や人以外のものたちと十六人の息子である王子たちにより、囲まれ、敬まわれて、教えを説いてくださるよう請われている、その人を。
-------	---	---